



伊藤穰一の

フューチャースケープ

ROUND1 .NETとオープンソースの微妙な関係

連載第1回目のお題は「.NETとオープンソース」。しかしこの.NETというも、世間を騒がせているわりには実体がわかりにくい。考えてみれば、ひとつのストーリーになっている。BASIC、DOS、ウィンドウズから始まったマイクロソフトという会社が、バリューをPCからOSに吸い上げ、IEでブラウザに吸い上げ、今度はネットに吸い上ようとしているのが「.NET」というわけだ。もちろんご存じのようにこのストーリーにはいろいろディテールがある。でも、結局主人公はいつもマイクロソフトというわけで……。さて、どこから話を始めよう。現在から語るのがいいのか。過去から語るのがいいのか。マイクロソフト側から語るのか、オープンソース側から語るのか。

協力・平田大治 高間剛典  
構成・先田千映  
Photo: Nakamura Tohru (mermaid)

マイクロソフトのCEO、スティーブ・バルマーという人は、オープンソースのことを「癌であり、コミュニズム(共産主義)だ」なんてことを言ってひんしゅくを買っていた。ところが、今やマイクロソフトの幹部がオープンソースの会議に顔を出したりシェアードソース(shared source<sup>1</sup>)なんていうことをやり始めたり、確実に歩み寄りを見せている。

不思議なもので、1998年の秋に出回った「ハロウィン文書」<sup>(2)</sup>というマイクロソフトの社内メモでは「Linuxは悪いもんだからブツ潰しましょう」という姿勢が打ち出されていた。これに対してエリック・レイモンド<sup>(3)</sup>のような人が反論コメントを出したりしていた。少なくとも昨年まではオープンソースを「危機」と見なしていたんだ。

ところがマイクロソフトも最近はずいぶんオトナになった。それを代表するスポークスマンがクレイグ・マンディーという上級副社長なんだ。彼はオープンソースコミュニティの会議に出席して「バルマーの発言はオープンソース全体じゃなくてGPL<sup>(4)</sup>というライセンス形態に対するものだし、うちの幹部にはもう絶対そんな発言はさせない」と明言している。悪いのはGPLで、BSDライセンス<sup>(5)</sup>のようなライセンス形態だったらオッケーなんだと。まあ一見して論理的にも納得できる方向に修正したわけだ。

GPLをベースにして作ったソフトウェアはすべてGPLにのっとって、タダで提供しなくてはならないし、ソースコードもオープンにしなくてはならない。言ってみれば「自由」という厳しい制限がGPLにはある。でも、BSDならソフトウェアを拡張した部分についてはソースコードをクローズドにできるし、販売もできるからビジネスにつなげやすい。

本当のGPLのソフトウェアでビジネスをするなら、サポートやコンサルティングでしかお金をとれない。サポートやコンサルティングで成功しているビジネスモデルとい

うのは今のところ(あるのかもしれないけど、すごくうまくいっているところは)なくて、ベンチャーキャピタルから投資してもらおうと思っても、それにはスケラブルなビジネスプランを描けなくては行けない。

結局、オープンソースをやりながらどうやって食っていくかということになる。中には優秀な人や、小さな会社でならうまくやっていけるところはあるだろうけれど、アメリカでさえあんなに難しいんだから日本ではほとんど無理っぽい。ベンチャー企業じゃなくて、国家に技術を提供しているようなSI企業なんかややるなら、まだ理解できなくもないけれど。

それから、例の「シェアードソース」。マイクロソフトのオープンソースへの歩み寄りとして、わかりやすく具体的な試みと考えられている。でも、これはオープンソースとは似て非なるというか、まったくの別物と考えた方がいいと思う。

シェアードソースでは、ソースコードをみんなに見るようにするけれど、あくまで「見るだけ」。変更してはダメ、コンパイルして使ったり配ったりするのはもちろんダメ。見るだけの権利というわけだ。

オープンソースの良さってというのは、いろんな人がプログラムのソースコードを見て、バグを直してくれるところ。テストしてもらってどんどん良くしてもらおう。そういう良さは利用するけれど、絶対にソースコードを触らせない。これじゃ「オープン」と言うより「ガラスの箱に入っている」ようなものだね。

アメリカの友人知人との話では、今のシェアードソースの考え方がマイクロソフトの限度。僕の考える「オープンソース」(6)はたぶんやらないだろうというのが評論家の間でも結論のようだ。

さて、親オープンソース派のマンディー氏が先述の会議で話した中で、ひとつはっきりしたことがある。それは、マイクロソフトは特許はしっかり守っていかうと考え

ているということ。著作権については、いずれはある程度妥協しなくては行けないだろう。でも特許があればその力でもって競合相手が出てきたときに對抗するよ、ということらしい。

中長期的に考えると、いろんな論文でも言われていることだけれど、たぶん著作権ってというのは「価値がなくなる」。どんなルールを作っても、コピーできないものを作るのは無理。サブスクリプションやサービスで儲けるビジネスモデルしかネット上では生き残れない。

これをマイクロソフトもわかっていて、「ソフトを売る」ことには見切りをつけて、すでにPassportなどでサブスクリプションベースのサービスに切り替え始めている。アプリケーションのソースコードとかそういうスタティック(静的)なものよりも、信用とか、特許とか、そういうところでお金をとっていかうということらしい。

そこで.NETの話ともつながってくるんだけれど、はたしてマイクロソフトは次どこで儲けようとしているんだろう? まず、Passportの課金のところ、デジタル認証のところだろうね。

「マイクロソフトに認証されていないものを走らせたなら危ないよ」「マイクロソフトのPassportだったら小さなモバイルアプリケーションも全部ちゃんと課金できるよ」「マイクロソフトのネットワーク内だったら安全だよ」というネットワークの中で、情報をXMLで楽にやりとりできるようにする。そこでインフラを用意したマイクロソフト国家が「税金」を徴収するという仕組みだ。オープンソースに対しても「君たちは.NETに賛同しているから入国していいよ」「君らはGPLだから入れてあげないよ」。そんな感じで共存できる人はマイクロソフト国家に取り込んでいく。

どうやらマイクロソフトは、ソフトウェアを作って利益を得ている人たちの層(レイヤー)から利益をガバッと吸い上げられる新たな利益のレイヤーを作ろうとしている

一度は對抗するが  
シェアードソースで  
オープンソースと同じ  
方向に進む。

.NETは新しいレイヤーを  
ネット上につくって  
権利ビジネスで  
利益を得るモデルだ。

ようだ。でも考えてみればマイクロソフトはそもそもDOSを作ってたんだ。ディスクの中味を読んだり書いたりするための小さなプログラムで、それ相応の利益をあげていたわけだ。そのレイヤーをどんどん厚くして、ウィンドウズから次はブラウザー、そして今度はネットワーク上でサービスを「作る人」と「使う人」の間に入るレイヤーになろうとしている。このレイヤーは薄っぺらだけど、とても広い。搾れば大きなバリューを取れるということになる。

僕の理解している限りの.NETの具体像は、簡単に説明すると、こうだ。

まず、ウィンドウズのマシンじゃなくても、自分のパソコンじゃなくても、学校でも、会社でも、カフェでも、マイクロソフトのサイトにつないで本人認証して、ネットから自分の環境を呼び出す。たとえばパソコンの画面に天気予報と株価、カレンダーなんかが表示されるとする。その画面を表示するにはマイクロソフトのデジタル署名で認証されたウェブサービスを利用して各種のデータを吸い込んでくる。そのカレンダーやらなにやらは、それぞれXMLであちこちのサーバーからかき集めて持ってきて、スケジュールは他の人とリアルタイムにリンクしていたりする。端末はシンククライアント化してPC以外の機器でもよくなる。つまり、なにがどこにあるかはどうでもよくて、すべてを認証してつなげるXMLのパーチャルなネットワークをマイクロソフトが用意する感じだ。情報に関する基盤を占有しようってことだね。

まあ、そういう利益の構図の「絵」はあるにせよ、具体的に実装をどうするかとか、アーキテクチャーをどうするかとかは、ビル・ゲイツが頭のいいエンジニアを集めて一生懸命やっていることなんだと思う。投入しているリソースもハンパじゃなくて、社運を賭けているというのがピッタリはまる。XMLへのこだわりに関して、スティーブ・バルマーが「XMLはパーソナルコ

ンピュータと同じくらいの革命だ」と言っているくらいだ。

こうやってハードウェアに依存しないようになってくると、今までみたいに、自分たちのOSやアプリケーションを売るためにハードウェアベンダーとくっつけている必要は当然なくなるだろう。NETの世界が実現するとハードウェアベンダーとのかかわりが薄くなる。冗談だけどベリサインを買収するって話もあるくらいマイクロソフトは「認証」ということを大きく考えているようだ。

「認証」を一手に引き受ける.NETの世界が実現すれば、お金の集め方というのかなりフレキシブルになってくる。実際のところ、(違法)コピーすることでウィンドウズのシェアが広がっていったようなところがあつたけれど、XPでそれができなくなってシェアが落ちるということにはならない。基本的なものはタダ同然にして、つなげる度にこまめに、あるいは包括的に課金すればいいんだから。逆に言えば.NETのネットワークにつながっていないと意味がないソフトを作って、付加価値をどんどんネット上に置くようにする。「認証ができる」ということの力がこういうところで発揮されるわけだ。

べつに「.NETによるマイクロソフト国家の世界征服か?」みたいに煽っているわけじゃない。もちろん、今見えているだけでも.NETには問題がいくつかある。

まずは独占禁止法。これはマイクロソフトゆえに独禁法あり、みたいなもので当然と言えば当然。しかし、多くのユーザーを持つISPなどの会社、たとえばAOLやニフティはすでにユーザー認証をビジネスにつなげている。だから、認証については独占するのではなく、仕組みをオープンにして取り込もうとするだろう。もっとも簡単なことではないだろうけど。

次はサン・マイクロシステムズとかの対抗勢力だけど、エンドユーザーとのかかわり

がない彼らは、.NETの潮流に乗りながらその一部に穴を開けるくらいのもだろう。あとは、アドビみたいなソフトメーカーやコダックなんかのデジタルカメラを作るようなハードウェアベンダーをどの程度取り込んでいけるかが結構課題になってくる。

それから、将来のエンジニアをどうやって取り込むのかや、システムとかプログラミングとかに対するブランディングやマーケティングの問題もある。

対策として、C#( 7)やCommon Language Runtime( 8)を出してきて「.NETプラットフォームには将来性がありますよ」と若い優秀な技術者を引っ張り込むためのエサにしているみたい。インターネットの世界は昔から優秀な人たちの小さなグループがおもしろいものを思いついて発展してきたところがあるから、彼らに開発環境として選んでもらうことがとても重要だというのはマイクロソフトもハッキリ認識していると思う。

あとは中国も問題。2003年にはネットユーザーの数がアメリカを超えるという国のエライ人が、「.NETなんてイヤだよ、主導権はあくまで政府がとるよ、中国はLinuxでいくよ」ということになれば影響はかなり大きい。

要するに、国としての安全保障を考えると、ソースコードを完全に公開していないマイクロソフトは国家レベルでは信用できないということだ。

と、まあ、そういうことを考えていくと、.NETにも自然なすき間が出てくる。

結論として、.NETとオープンソースは、対立構図というよりは、むしろ両者とも同じ流れの中にあるんだと言える。著作権から、特許やネットワーク、認証、サービスというところに、みんなが利益源をシフトさせていこうとしている。

とにかく大事なものは、新しいものが生まれる余地を残しておくということじゃないのかな。

## 【用語解説】

1 シェアードソース  
オープンソースのライセンスとしては下記のGPLが有名だが、これに対してマイクロソフトは、シェアードソースというライセンスのモデルを提唱している。ソースコードを開発者などに公開はするが、商品としてはマイクロソフトがコントロールするというもの。

2 ハロウィン文書  
Linuxなどのオープンソースソフトウェアの脅威に対してマイクロソフトが社内向けに配布したとされる、オープンソースへの対抗策が書かれた文書。山形浩生氏による日本語訳と詳しい解説が、下記のURLで参照できる。  
[www.pobox.org.sg/home/hiyori13/freeware/halloween.html](http://www.pobox.org.sg/home/hiyori13/freeware/halloween.html)

3 エリック・レイモンド  
本名はエリック・スティーブン・レイモンド。オープンソースムーブメントの最重要人物。彼が書いた論文『伽藍とバザール』によって、ネットスケープがブラウザをオープンソース化したのは有名。オープンソースの推進組織であるオープンソースイニシアティブの代表を務める。

4 GPL  
GNU General Public Licenseの略で、いわゆるオープンソースソフトウェアの多くがこのライセンスを採用している。Linuxも採用しているソフトウェアの1つ。このライセンスでは、ソースコードは誰でも見られるし、それを改変して配布することもできる。ただし、改変したらそのソースコードを公開しなければならない。

5 BSDライセンス  
Berkeley Software Distributionの略で、カリフォルニア大学バークレー校で開発されたUNIXの配布形態。そのライセンスはオープンソースである。改変したソースコードにはオープン義務はないので、GPLと比較してビジネスで利用しやすいだろう。

6 僕の考えるオープンソース  
オープンソースといってもいろいろあるが、ここでは「ソースリストを見ることができる」「改変できる」「改変したものを配布できる」こと。

7 C#  
.NET戦略の中核を担うマイクロソフトが開発したプログラミング言語。Javaとの類似点が多いと指摘されている。

8 Common Language Runtime  
これもまた.NETの中核を担うもので、プログラミング言語に依存しないプログラムコードの実行環境。



from Joi's Diary

[www.neoteny.com/jito/](http://www.neoteny.com/jito/)

【2001年8月20日】

シンガポールのCommerce Exchangeっていう会社のTan Lai Sengと会った。一番最初にTan Lai Sengと会ったとき彼はシンガポール大使館で働いていた。大使館に比べてどうですかと聞いたら、大使館の方が絶対楽だといっていた。でもあんなとこに長い間いてしまったら頭が海栗(not his exact words)になってしまうのもっと刺激がある仕事に移ったといっていた。楽な仕事をしながらポーーーーと生きてる日本人サラリーマンや官僚の方もこういう風に思ってもっともっと起業してくれればいいのにと思いました。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)